

演題

「想像と創造」地球の「じゅもじゅん」

講師

映画監督

安藤 桃子 氏

【講師紹介】

ロンドン大学芸術学部を卒業後、ニューヨークで映画作りを学び、二〇一〇年「カケラ」で監督・脚本デビュー。一四年に、自ら書き下ろした長編小説「0.5ミリ」を映画化し、数々の賞を受賞。

その後、高知県に移住し、子ども達との映画作りやアートなど、食育、自然、農業を通じて、優しい地球の地場づくりを行う。

二三年一月、映画を通じて心と文化を伝える「キネマ・ミュージアム」がオープンするなど、多岐にわたり活動中。

父は俳優で映画監督の奥田瑛二さん、母親はエッセイストでコメンテーターの安藤和津さん、妹は俳優の安藤サクラさん。

【講演内容】

○高知県への移住
坂本龍馬しか知らなかったが、一〇年前に二つ目の作品「0.5ミリ」のロケを高知県で行ったのをきっかけに高知県に魂のような古里を感じた。移住することで、この土地からたくさんイマジネーションやそこから生み出されていく新しい世界を映画監督だからこそシナリオに改訂あることは全部具現化できる仕事であり、それならば、日常の中で出会う人々と色々なことを想像していくことをここでやっていけたらという思いで移住することを決めた。

○なくなっていく映画館

全国で映画館がなくなっていることや映画が縮小されていることについては、悲観的にならず、映画文化はなくならないと考えたり、映画を自分が届けていきたい出口の部分として意識を持ち始めたりしていいなかで、みんなが集まり、嬉しさや元気になる場所を地域の中心に作ることに、映画館本来の場所だと信じて、キネマM（ミュージアム）をオープンさせ

た。

映画館ではあるが、ミュージアムとしての機能を持たせているため、映画館という枠組みから外れて様々なことが経験できる場所としての役割を担っている施設である。

○映画作りのワークシヨップ

ホスピタルアート（無機質な病院という大きな空間をキャンパスとして使い、物語と絵を組み合わせた作品）を主な活動としているイラストレーターの小笠原まきさんとの出会いの中で、子ども達のために映画作りのワークシヨップを始めてみたらどうかという提案や子ども達が未来をすべて描いていく存在になってほしいという思いもあり、講演会のテーマにもなっている「地球のこともビジョン」を立ち上げた。

監督や役者などの各部署に配置された全員が柱になって映画が完成するが、一人一人が大切な役割として存在しているため、理想的な社会の姿となるのを感じた。

また、ワークシヨップにはいろいろな子どもが興味をもって参加している。おとなしい子もいるが、映画作成においてホ

ジションを与えられると、周りに遠慮して表現できなくても、自分がやらなれないといけない気持ちでがんばってくれるため、一人一人の成長の一助となっていることを実感するワークシヨップとなっている。

○ベストな環境

種はいっぱいあっても、栄養と育て方次第でまったく違う成長をするように、子どもにも適切な育て方があることを親になって感じる。

子どもにもベストな環境を与えることが、創造性豊かな人間に成長すると感じる。

○終わりに

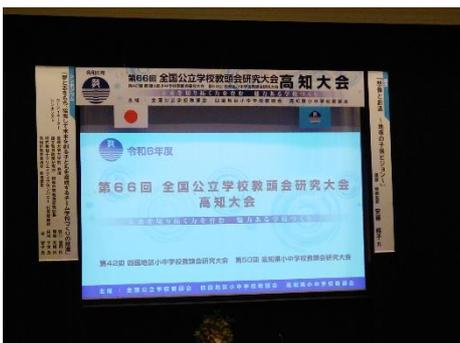
楽しく、わくわく、のびのびとできることが難しい時代になっている。日本の社会に生きているといろいろな縛りがある。例えば、やり方・考え方の違い、昭和世代の考え方で生きてきた世代・・・など。ルールを決めていくが、そこからはみ出すと仲間外れにすることもあり、形通りにはいかない現状もある。だからこそ、クリエイティブな力が大切になってくる。また、動画としての言語が子

ども達の中では、スタンダード化しているように感じる。ワークシヨップを通して、子ども達が本来持っている美しいビジョンを発揮してくれたらと思う。

【感想】

自分の感性や発想力の豊かさを最大限に発揮しながら、子どもに接しているとともに、決断力や行動力なども窺えた内容だった。

楽しく・わくわく・のびのびした学校を作っていくためにも、2つの「そうぞう（想像・創造）」を大切にしていくことが、子どもを大きく成長させていくということをつくづく考えさせられる講演だった。



第1 A分科会
教育課程に関する課題

指導助言者

矢ヶ部 哲也

山口県

防府市立大道小学校 校長

福井 佳織

高知市立義務教育学校

土佐山学舎 校長

提言者

井上 尚枝

鏡野町立香々美小学校

藤井 英次朗

美咲町立柵原学園

本田 卓也

那賀町立鷲敷中学校

研究主題

1 義務教育学校開校に向けた教頭の役割について、教職員が主体的に取り組むためのカリキュラム・マネジメント

2 連携型中高一貫教育の推進における教頭の役割、那賀地域中高一貫教育の取組を通して

「1」について

① 小中合同企画会と起案
・義務教育学校の目指す方針

（教育振興基本計画、4・3・2年制等）との整合性

・9年間を見通した妥当なカリキュラムとなっているかを学習指導要領と照らし合わせ確認

② 教務主任との連携

・各種教育・各教科等指導計画が計画的に作成されているか確認

・指導計画等の様式及び共通の表記方法の提案

③ 小中一貫教育担当者会

・スケジュールや組織等を検討・実施・改善を図るとともに、研修会の方向性や進捗状況を確認するための小中一貫教育担当者会を月1回開催

④ 探究的な学びの研修会と合同研修会

・外部講師を招いた研修会や教職員参加の授業公開、乗り入れ授業の企画・運営・調整

⑤ 成果〇と課題●

○指導計画等の作成において、指導・助言したことは、義務教育学校への理解にある程度有効であった。

○様式及び共通の表現方法の提案は、起案文書の差し戻しを減らし、教職員個々

が主体的に取り組むために有効であった。

○特色ある教育を最初に作成したことや研修会を開催し教職員の理解を進めたことは有効であった。

●小中の取組が異なるため、作成に時間と労力を要した。

●乗り入れ授業を行うためには、免許の保有が必要である。

●新しく赴任してきた教職員に義務教育学校の意義に関する研修が必要である。

⑥ 指導・助言

・義務教育学校の開校に向けては、文化の違う教職員一つにまとめるためにも教頭の日頃からの声掛けが大切である。

・子どもや教職員の成長、地域・保護者と直接つながることができるとは、教頭にしかない強みである。

・義務教育学校は、義務教育の入り口から出口までを見届けることができる素敵な場所である。

「2」について

① 中高一貫教育研究委員会

・高校の現況説明及び昨年度の取組の確認及び本年度の方針の立案

・各専門委員会で作案した本年度の計画についての説明及び再検討

② 各委員会における実践

・高校から教師が中学校へ出向き、週2時間の授業実施
・中学1年時からの系統的な進路指導
・地域ぐるみの生徒指導体制の構築

・高校及び中学校で行われる人権学習への参加

・各校の生徒会執行部の親睦

③ 成果〇と課題●

○高校の教師が授業を行うことで生徒のモチベーションがアップした。

○中高の縦のつながりと連携中学校間の横のつながりを密にすることができた。

○中高の共通目標を基準に系統立てて人権学習を構築することができた。

○地域全体で見守ることで生徒が安心感をもって生活できた。

●担当教頭が変わっても取組を着実に積み重ねられるようにすること。

●取組の形骸化

④ 指導・助言

・平成13年度から中高一貫教育が始まり、今日まで教頭のリーダーシップが5つの研究委員会（進路指導・人権教育推進・特別活動・生徒指導特別支援教育・教務）を支えている。

・教頭を中心にPDCAサイクルを回しながら、常に進化・挑戦していることが連携型中高一貫教育を推進している。

・地域存続に関わるミッションであり、行政の協力は欠かせない。何よりも保護者・地域の協力は不可欠である。専門性の高い内容を学習できることは、学力の向上につながる。

・高校生との交流は、中学生のよき目標となり、個性の伸長につながる。



第2分科会

子どもの発達に関する課題

指導助言者

佐光 隆

直島町立直島中学校 校長

山中 恵美

高知県教育委員会

人権教育・児童生徒課 課長

提言者

阿部 俊介

中標津町立中標津小学校

山西 秀樹

宇和島市立城東中学校

研究主題

1 確かな学力の定着と心豊かな人間性の育成に係る教頭の関わり～授業改善や学習習慣の改善、学校間や地域・家庭との連携協働を通して～

2 自己肯定感を育てる教育活動の推進と教頭の関わり～生徒会・児童会連携を通して～

「1」について

- ① 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善
- ・各種調査結果等を活用した授業改善の取組
 - ・授業津売り家言語活動の充

実に係る授業力向上研修の実施

・日常の授業と家庭学習を繋げる取組

② 学校間の連携・一貫及び学校・家庭・地域の連携協働

・キャリア教育の視点からの小中連携・一貫の取組

・家庭・地域を巻き込んだふるさと教育の充実

③ 成果〇と課題●

○教職員に対する研修を充実したことにより、授業改善が進み、全国の平均正答率との差が縮められた。

○CS等と連携してキャリア教育やふるさと教育の充実を図ったことにより、諦めない心や郷土に誇りや愛着が育まれた。

●より児童生徒の実態に即して適切な対応策を練る必要がある。

●成功事例を普及し、館内全体の取組として充実させていく必要がある。

④ 指導・助言

・学校で学ぶことの意義についても目を向けながら取組を推進していく必要がある。

・生徒指導と学習指導の一体化が必要である。

・目指す子供像について話し合う小中連携を進めてほしい。

・学校の「強み」を使って「課題」を解決していくことも大切である。

・地域連携においても、子供の姿を伝え合える関係づくりや、教員のやる気をおこさせる人間関係づくりを大切にしていってほしい。

① 推進にあたっての実践事例紹介

・児童会・生徒会担当者名簿作成

・生徒会交流会交通費の予算化

・青少年活動補助金申請

・各中学校区児童会・生徒会交流会

（PTAの係活動を中学生ボランティアに依頼、児童会・生徒会合同で制服の着こなし方等）

・市内生徒会交流会組織によるプロジェクトの推進やイベントの運営、職場体験学習の運営等

・地域貢献

・小中合同での自然保護活

動、中学生が地域かるたを作成し、小学校に寄贈、ボランティア手帳の活用等

② 自己肯定感アンケートの実施

○教頭がコーディネートし、児童会と生徒会が交流することで学校行事の成功に貢献できた。

○母校や地域への愛着が高まった。

○自分には良いところがある、「自分のことが好き」と答えた生徒が増え、自己肯定感が高まったことがうかがえた。

●継続した取組になるよう組織づくりが必要である。

●関係機関と連携し、活動に必要な予算を確保していく必要がある。

●担当教員以外の教員の意識も高められるような手立てが必要である。

④ 指導・助言

・他や周りから認められた、自分が役に立っていると

・自己有用感を高めていくことが大切である。

・子供たちに、成功体験を感じさせることが重要である。

・あまり手を挙げたり、発言したりしない子をターゲットにした取組も推進してほしい。

・学級活動の取組内容を改善すべきである。充実を図ってほしい。

・「場・金・人」を確保することは、どんな場面でも教頭の重要な仕事である。

・ネットワークづくり、地域貢献の取組を「見える化」することで協力を得ることも大切である。

・「チーム学校」の在り方について再考してほしい。



第4分科会

組織・運営に関する課題

指導助言者

稲上 敏男

札幌市立清田小学校 校長

熊岡 彰

高知県中部教育事務所 所長

提言者

田山 恵子

茨城県小美玉市立

美野里中学校

岡野 隆伸

香川県丸亀市立

南中学校

研究主題

1 地域とともにある学校を

目指すための教頭の関わり

～学校運営協議会の設立と

その充実を通して～

2 楽しい学校・学級づくり

を目指す組織・運営の在り

方と教頭の役割～帰属意識

を高めるトルネードマネジ

メントの実践を通して

① 学校運営協議会設立まで

の経緯

・平成二三年 県内初発足

・学校再編による頓挫

・平成三〇年 立ち上げ

・令和四年 市内全ての学

校で設立

・令和五年 社会教育主事

の配置

② 人選や規則の制定

・十五名以内

・幅広い職種や年齢構成

・渉外担当は主に教頭

③ 学校運営協議会や学校支

援ボランティアの活用

・協力や支援内容

・ウインウインの関係

・窓口は教頭

④ 特色ある活動と教頭の役割

・稲作体験

・オリジナルキャップ

・防犯教室

・空き教室の開放

・スポーツフェスティバル

⑤ 教頭の苦勞と現在の取組

・設立時の教頭の負担増

・合同研修会の実施

・推進員の活用

⑥ 成果と課題

○当事者意識の高まり

○社会教育主事と密な連携

○合同研修会後の理解促進

●教頭の負担増

●若い人材の参加

●施設開放や管理運営が曖昧

●役割分担や連携の再検討

⑦ 指導・助言

・「これまでよりもよくなっ

た」の実感が必要である。

・地域コーディネーターの

必要性と人選がポイント

になる。

・教頭として全体を俯瞰し

連絡・調整に重点を置く

ことが持続的活動につな

がる。

・「形」をつくるよりも「つ

ながり」をつくることに

意識を持つてほしい。

「2」について

① 本校の事例について

⑦本校の状況の紹介

・活発な小中連携教育

・教育力や価値観の差

・若年研修対象職員多数

⑧三人のファシリテーター

(生徒指導主事・校長・

教頭)と巻き込みの開始

・生徒指導主事

キーワードの発案

・校長

・学校の方向性の揭示

・教頭

・帰属意識を高めるプライ

ドシールの作成

⑨トルネードマネジメント

の展開

・教頭⇄学年主任⇄担任

・学習意欲向上を図る取組

・集団生活向上を図る取組

・教頭⇄生徒会担当⇄副担当

⑩本校学校群への広がり

・各校教頭⇄児童会・生徒会

・地域⇄教頭⇄担当教員

・他学校群における状況

⑪本市の状況

・小中連携教育では教頭が

コーディネーター役

・今後学校運営協議会に地

域コーディネーター追加

⑫展開事例

・教頭⇄地域コーディネー

ター⇄学校支援ボランテ

ィア

・コミュニティ日より活用

・ステッカーの活用

・給食指導支援ボランティア

・登下校見守り活動

・中学校教頭⇄小学校教頭

合同学習強化週間

合同あいさつ週間

⑬ 成果と課題

○職員九割肯定的な回答

○若年教員の指導力向上

○若年教員の帰属意識向上

○教頭と若年教員の関係良好

○市全体での同じ方向性

●協働体制の構築

⑭ 指導・助言

・「だれの心火をつけるか」

を念頭に置いて実践する

ことが重要である。

・課題を明確にし、具体的

な改善につなげる取組が

素晴らしい。

・管理職ミーティングを適

宜行うことで、指示命令

系統の確認が行われ、管

理職の共通認識を高めて

いる。

・若年教員の割合が高くな

る中で、自己決定・実践・

評価(承認)の取組は重

要となっていく。

第1B分科会 教育課程に関する課題

指導助言者
服部 倫子

堺市立深井小学校校長
蛭子 穰

高知県教委小中学校課課長

【提言テーマ1】

地域の特性を生かした魅力ある教育活動を目指して、小中連携教育を推進するための教頭の関わりを通して、

提言者

服部 雅之

福岡県行橋市立中津小学校

実践例

(1)小中共通で取り組む学校の決まり

- ・各教室への「学校のきまり」「生活のきまり」「授業&学習のルール」の掲示
- ・標準服の変更
- ・小中教職員共同の公務分掌

(2)学力アップを図る教育課程の編成

- ・小学部での教科担任制の実施
- ・小中乗り入れ授業の実施
- (3)小中相互の校内研修への参加
- ・小中の校種を超えた授業参観と協議会の実施

(4)総合的な学習の時間における実践

・職場体験の実施（キャリア教育の視点から）

・地域との連携（社会福祉協議会、体験活動、人材活用）

(5)関係機関を介した児童生徒の理解

- ・SCも同席する小中合同生徒指導部会の実施（週1回）

(6)近隣教頭会との連携

- ・行事の調整や部活動地域移行への協議

成果と課題

○職員との協働的な関わりによって、小中連携教育の定着と推進が図ることができた。

○小中連携の活動を通して、児童生徒の自信や意欲の向上が見られた。

●地域の特性を生かした授業や学習支援、学校行事の継続的な実施

●コミュニケーションスキルを基盤とした地域人材の発掘や故郷への愛着と誇りを持つ児童生徒の育成

指導・助言

・職員を育てることが学校という組織を育てることとなり、校長のビジョンを職員と共有しやすくする。

・それぞれの校種にはそれぞれその感覚や文化がある。それらの違いを埋めていく橋渡しや場の設定が教頭の役目で

ある。

・地域連携の鍵は、地域の意見に職員が共感できるかどうかである。地域と職員の思いの違いをつなぐことが教頭の役割と言える。

・様々な成果を「見える化」し、職員のやる気を上げていくことが教頭の役割と言える。

【提言テーマ2】

魅力ある学校づくりに向けて教育課程の編成・実践評価、教職員の共同的な学び（授業づくり）及び児童への関わりを通して

提言者

萩野 真美

高知県の町立伊野小学校

実践例

(1)チーム対抗教材研究会＋授業研究会

- ・授業者のみでなく、低中高学年部がそれぞれに授業アイデアを作成し、プレゼンを行うことによる授業力の向上
- ・授業参観ウィーク、ふらっと1アップ研修の実施

(2)個別最適な支援をつなぐ校区内連携事業

- ・不登校に対応する取組の可視化をねらいとした「個別最適チェック表」の取組

・児童生徒支援加配を活用した個別支援

・保護者、地域、ボランティアによる児童玄関でのあいさつ運動

(3)学力向上ロードマップの作成

・全国学力学習状況調査の即日採点による学習課題の把握

・年間を通して学力向上と進捗状況を把握するためのGoalpostの作成

成果と課題

○学力向上、個別最適な支援を自分ごととして捉える職員が多くなってきた。

○教頭が始めたロードマップ作りは、今は各学年や研究部が作成するようになり取組が自走していると言える。

●教頭がリーダーシップを発揮しすぎると、各係の主体性が損なわれ、係任せにすると取組が停滞する場面が見られた。

指導・助言

・さまざまなアイデアを実行に移し、丁寧に物事を進めすぎると手数が増えてしまう。負担を減らすことは難しいが、負担感を減らすことができるのが教頭の役割である。

・インセンティブとフィードバックに取り組み



ことで、職員のモチベーションを保っている。職員との距離感を大切に「なんでも話して貰える」「この教頭先生なら相談できる」という関係性を築いてほしい。